

報道関係各位



(公財) 山階鳥類研究所
〒270-1145 千葉県我孫子市高野山115
電話：04-7182-1101 FAX：04-7182-1106
<http://www.yamashina.or.jp>



アホウドリ新繁殖地形成事業で移送・人工飼育したアホウドリから生まれた子の世代が小笠原に初めて戻りました

<環境省、東京都 同時発表>

平成29年3月24日(金)

(公財)山階鳥類研究所

- ・小笠原諸島^{むこじま}におけるアホウドリの新繁殖地形成事業※において、^{なこうどじま} 鴛島から約5キロ南の媒島にて、人工飼育個体から生まれ、2014年5月に巣立った個体が、本年3月1日、東京都の委託調査中に、鴛島に戻ってきて成長した姿で観察されました。
- ・この個体の雌親も同時に鴛島で観察されました。
- ・伊豆諸島鳥島から移送して人工飼育を行って以降、小笠原諸島での繁殖成功はこれまで3つがい合計4例確認されていますが、彼らから生まれた子の世代の小笠原への帰還は初めてです。このことは、移送個体が野生個体と同様に子を育てることができたことを示しており、移送個体の人工飼育が本当の意味で成功したことを示すものであるとともに、アホウドリの新繁殖地形成事業がさらに一歩前進したものと評価しています。

※この事業は、(公財)山階鳥類研究所が、環境省、東京都、米国魚類野生生物局、三井物産環境基金、公益信託サントリー世界愛鳥基金等の支援を得て、新しい繁殖地を形成する目的で、伊豆諸島鳥島のアホウドリのヒナを小笠原群島鴛島に移送(2008~2012年)し、その後モニタリングを実施しているものです。

1. 観察した個体

2014年5月に媒島で巣立った雌個体(カラーリング番号 緑M170)。年齢は3歳2ヶ月。発見時に東京都と特定非営利法人小笠原自然文化研究所が足環を装着しました。また同時に雛から採取したDNA分析から雌とわかっています。この個体の親は、2015年2月に媒島で確認された番い、雌(2009年鴛島巣立ちの人工飼育個体)と雄(鳥島生まれの野生個体)であるとわかっていました。

2. 観察の状況

2017年3月1日、東京都の委託調査中であった山階鳥類研究所の研究員が鴛島の北西部の雛飼育場所を、約300m離れた地点から望遠鏡で観察したところ、飛来したM170の個体がY11に接近する様子が観察されました。

3. 今回の帰還の評価

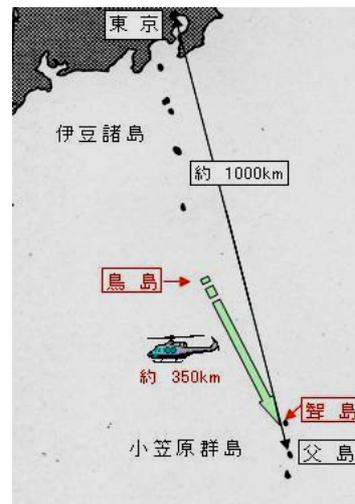
一般的に、移送・飼育という手段を用いて繁殖地形成を促す再導入活動では、暫定的な成功を得るまでに、少なくとも、(1)対象個体の自立、(2)対象個体の定着(非渡り性の場合)あるいは移送先への帰還(渡り性の場合)、(3)対象個体の移送先での繁殖

報道関係各位

成功（第2世代の誕生）、(4) 第2世代の定着あるいは移送先への帰還、(5) 第2世代の移送先での繁殖成功（第3世代の誕生）、の5段階のステップ達成が不可欠と考えられています(Soorae 2013, 2016)。これまで、(3)にあたる対象個体の小笠原での繁殖成功の段階まで確認されていたわけですが、今回、媒島生まれの個体が聳島に帰還したことで、対象個体の人工飼育が本当の意味で成功したことが示されるとともに、アホウドリの新繁殖地形成事業が一段上の(4)まで前進したと言えます。

Soorae, P.S. (Ed.) 2013. Global re-introduction perspectives 2013: further case-studies from around the globe. Abu Dhabi: IUCN/SSC Reintroduction Specialist Group.

Soorae, P.S. (Ed.) 2016. Global re-introduction perspectives 2016: case-studies from around the globe. Abu Dhabi: IUCN/SSC Reintroduction Specialist Group.



<媒島生まれの M170 (右) と親鳥の人工飼育個体 Y11>



撮影：山階鳥類研究所 提供：東京都
(小笠原群島聳島 2017年3月1日)

報道関係各位

< 媒島生まれの M170 (左) と親鳥の人工飼育個体 Y11 >



撮影：山階鳥類研究所 提供：東京都
(小笠原群島聳島 2017 年 3 月 1 日)

聳島およびその近くの島におけるこれまでのアホウドリの繁殖状況

	聳島	媒島(聳島から 7km 南)	嫁島(聳島から 22km 南)
2012-13 年	1 卵 (孵化せず)		
2013-14 年	1 卵 (孵化せず)	1 雛誕生	
2014-15 年	1 卵 (孵化せず)	1 卵 (孵化せず)	
2015-16 年	1 雛誕生		1 雛誕生
2016-17 年	1 雛誕生		

*アホウドリは 11 月に産卵し、雛は翌年 1 月に孵化して、5 月巣立つため、繁殖は年をまたぐ

この件についての問い合わせ先

プロジェクト責任者：(公財) 山階鳥類研究所 副所長 尾崎清明

電話：04-7182-1107、Fax：04-7182-4342、メール：ozaki@yamashina.or.jp

現場責任者(写真の問い合わせ先)：(公財) 山階鳥類研究所 研究員 出口智広

電話：04-7182-1107、Fax：04-7182-4342、メール：deguchi@yamashina.or.jp

広報担当者：(公財) 山階鳥類研究所 広報主任 平岡考

電話：04-7182-1101、Fax：04-7182-1106、メール：hiraoka@yamashina.or.jp

報道関係各位

<参考>

アホウドリ (*Phoebastria albatrus*)

ミズナギドリ目アホウドリ科

特別天然記念物

国内希少野生動植物種 (種の保存法、1993年指定)

絶滅危惧Ⅱ類 (環境省レッドリスト 2012)

分布及び個体数

- ・ 繁殖地は、日本の伊豆諸島鳥島と尖閣諸島
- ・ 非繁殖期には、北太平洋のベーリング海やアリューシャン列島、アラスカ沿岸まで移動する。
- ・ 1949年の調査で一度絶滅したと考えられたが、1951年に約10羽が鳥島で再発見された。1971年には尖閣諸島で少数の生息が再発見された。
- ・ 減少原因は、1890～1900年代に羽毛採取のために大量に捕獲されたことによる。
- ・ 保全上の成果などもあり、現在個体数は約4,200羽 (尖閣個体群は除く) まで回復したと推定されている。

形態及び生態

- ・ 成鳥は全長が84～94cm。
- ・ 成鳥は全体に白く、風切羽や尾羽が黒い。頭部は淡黄色。ヒナから2歳ごろまでの若鳥は全身黒褐色で、成鳥羽になるまでは7～8年かかる。
- ・ 繁殖期は10月～翌年5月。
- ・ 巣立ち後3～4年で巣立った場所に帰ってくる。5歳前後から繁殖に参加するが、巣立った場所で繁殖を行う傾向が強い。

アホウドリの小笠原再導入

現在、アホウドリのふたつの繁殖地のうち、伊豆諸島鳥島は活火山であり、万一噴火があった場合には、アホウドリの個体群に大きな影響が出る可能性がある。もうひとつの繁殖地である尖閣諸島は、繁殖状況の調査や保護活動を行うのが難しい現状である。このため、過去にアホウドリが繁殖していたことが知られている場所から、1カ所を選んで、アホウドリの営巣地を復活させることで、本種の復活を一層確実にすることが望ましいと考えられた。このために山階鳥研では、生まれた場所に戻って繁殖する同種の習性を利用して、ヒナの移送により小笠原群島聳島にアホウドリの繁殖地を作ることとした。2008年から2012年の5年間に合計70羽のアホウドリのヒナを鳥島から聳島に移送して人工飼育し、69羽を巣立たせた。聳島の飼育地には2009年から野生のアホウドリの飛来が観察されるようになり、2011年からは人工飼育した個体の帰還が認められた。2012年11月14日には、2008年に巣立ちした人工飼育個体 (カラーリング番号Y01、雄) と野生個体 (足環なし、雌) の間に初めて産卵が確認された。

なお2014年5月に、聳島から約7キロ南の媒島 (なこうどじま) において、人工飼育個体 (2009年巣立ち、カラーリング番号Y11、雌) と鳥島で生まれた年齢不詳の雄との間で1羽の雛が誕生したことが東京都と小笠原自然文化研究所によって確認されており、足環 (M170) の装着とDNAの分析がなされた。また2016年5月には聳島から約22キロ南の嫁島 (よめじま) で雛1羽が確認されている。この雛の親鳥は不明だが、山階鳥研がこの事業で人工飼育して巣立たせた個体、あるいは同事業で誘引された個体と推察されている。

この事業は、(公財) 山階鳥類研究所が、環境省、東京都、米国魚類野生生物局、三井物産環境基金、公益信託サントリー世界愛鳥基金等の支援を得て実施している。

(以上)